

続・吉田宗恂とその周辺 ―コンピュータと図書館を活用して―  
時慶記のキリシタン(6) 前田玄以と息子たち

島野達雄

前田玄以は、本能寺の変のあと京都所司代に任じられ、京都の公家たち、とくに西洞院時慶とは、連歌会で同席するなど、親しく交際していた。

玄以自身はキリシタンではなかったが、二人の息子はキリシタンであった<sup>[1]</sup>。

フロイスは、インド副王の書状に対する秀吉の返書を、イエズス会の意向に沿うよう書き改めた際、玄以がジョアン・ロドリゲスらに協力を惜しまなかった、と伝えている<sup>[2]</sup>。

時慶は玄以が亡くなったあと、追善の連歌会を開き、未亡人とも音信（いんしん・進物）を交わし続けた。

本稿では、なぜ前田玄以が時慶およびイエズス会に接近したか、仮説を提示したい。

## 1. 京都所司代・前田玄以

豊臣政権の五奉行の筆頭、前田玄以は、天正 13 年（1586）7 月から慶長 5 年（1600）9 月まで京都所司代をつとめている<sup>[3]</sup>。絶対的な権力者、豊臣秀吉の側近<sup>[4]</sup>として、京都における秀吉の代理人とも言える立場にあった。

直ニ玄以法印へ礼ニ行、傍輩衆群参（天正 15.1.4）

関白殿〔秀吉〕へ諸礼可有之由候処、雪故被相延由也、明日十一日ニ可有参勤之由、玄以法印ヨリ折帑一帑ニテ諸公家・諸門跡へ被相触候（天正 15.1.10）

直ニ飛中〔飛鳥井中将雅継〕ト同道シテ聚楽へ行、法印〔前田玄以〕ニ対面シテ用所共申調帰也（天正 15.2.18）

又飛中ヨリ遣在之、直ニ行、法印密談事在之而行、則聚楽ニテ対談相済、晚炊在之、直ニ天神へ参詣シテ飛中へ行、其分申渡也（天正 15.2.25）

最後の「法印密談の事」が何を意味するのかよくわからないが、玄以、時慶、時慶の従兄弟の飛中すなわち飛鳥井中将雅継（のち雅庸）の三人の間に、ほかの公家衆以上の深い交際があったことを想像させる。飛鳥井雅継（以下、雅継）については、本稿の最後に触れる。

3 月 6 日には、禁中の花見にひそかにやって来た玄以に酒を勧め、「機嫌にて小謡等在之、月の山端に落迄被居候」という記事がある。

3 月 30 日には聖護院道澄（聖門）興行の連歌会に、玄以・時慶・雅継の三人のほか、細川幽斎・烏丸光宣・里村紹巴・速水友益・梅軒宗句<sup>[5]</sup>など 13 人が出席。

4 月 4 日の烏丸光宣興行の連歌会には、細川幽斎と梅軒宗句は不参加だが、3 月 30 日とほぼ同じ 13 人が出席。玄以・時慶・雅継が三人揃って、立て続けに連歌会に参加している。

なお、「飛中と同道して聚楽へ行」、「聚楽にて対談」とあることから、この頃、玄以は、豊臣秀次の指揮で工事が進められていた聚楽第に屋敷を構えていたことがわかる。聚楽第

の建設<sup>6</sup>にともない、洛中は大規模な区画整理がおこなわれた。天正 15 年（1587）5 月 10 日条に「今日、本願寺在京之時之屋敷、従法印被渡間、請取に円内匠<sup>7</sup>被行也」とあるように、時慶は、本願寺光佐（顕如）の京都の屋敷の受け渡しに仲介の労をとっている。

## 2. 民部卿法印の入眼

同年 5 月 4 日条では「午刻民部卿法印、飛鳥井中将〔雅継〕鞠（まり）興行にて見物に被行、予行、堂上四人也」、10 月 22 日条にも「民部卿法印、紅葉御興行」とあり、玄以は単なる「法印」に「民部卿」の官職をつけて呼ばれるようになっていく。民部卿は勅任官であり、入眼（じゅがん）つまり執筆の大臣が氏名官職を記入することで任命書類が完成する。

時慶は正式な任命以前から玄以を民部卿法印と呼び、雅継と入眼のために奔走している。

飛中〔飛鳥井雅継〕へ行、法印へ入眼事ニ付テ談合（天正 15.10.19）

法印存分在之而今日ハ入眼義不相済シテ帰也（天正 15.10.20）

陽明〔近衛信輔〕へ参候、民法（民部卿法印）へ入眼事被仰也（天正 15.11.20）

於聚楽法印問入眼也、近衛「信輔」殿・実相院〔義桓〕・鹿苑寺・玉泉坊〔小川宗久弟〕扱ノ人数ソ、振廻在之、夜半過ニ帰也（天正 15.11.22）

12 月 23 日、禁中から玄以書き出しの切手で、扶持米五石が時慶へ届けられた。

飯後従 禁中為御扶持五石ノ切手、民法（民部卿法印）書出ニテ被下候（天正 15.12.23）

この年、時慶は 36 歳。官位は正四位下。扶持米五石の官職は右兵衛佐であった。

玄以は豊臣政権の司法・行政官として、連歌仲間の時慶の希望に沿うよう裁定する時もあったし、希望に沿えない場合もあった。

文禄 2 年（1593）閏 9 月 6 日には「民部法印〔前田玄以〕へ高嶋西浜の義訴詔に」、時慶をふくむ公家 5 人で行き、首尾よく「民部法印より高嶋の折紙被出候」となっている。

天正 19 年（1591）正月 21 日には「鳥飼堤普請に山城国中、人足罷出由候、紫竹人足御理事、民法〔前田玄以〕へ申遣候処、不叶」とある。

## 3. 伴天連追放令までのキリスト教会

じつは天正 15 年（1587）は、6 月 19 日に伴天連追放令が発布され、イエズス会が恐慌をきたした年である。

前々年の天正 13 年（1585）7 月 11 日には、関白となった秀吉が大坂城近くの教会を訪問し、キリスト教の布教の自由を認めている。

前年の天正 14 年（1586）5 月 4 日、イエズス会は、城内のキリシタンや北政所を通じて、仏教徒から布教活動を保護する「特許状」を秀吉に発行させることに成功している<sup>8</sup>。

「司祭（副管区長ガスパル・コエリュ）は、大坂で関白（秀吉）訪問の任を果し終えると都に向かった。すでに幾日も前から副管区長の来訪を待ち望んでいたキリシタンたちは（晴着を着て）洛外の相当距たったところまで出向いて彼を迎えた。…司祭はただちに都の奉行（前田玄以）と関白の甥（秀次）を訪れた。…両人はともに几帳面なところがあり、あらゆ

る礼節を尽して司祭を鄭重にもてなした」<sup>9)</sup>。

天正 15 年 1 月 2 日、コエリュから派遣されたフロイスが大坂城に秀吉を訪問。2 月 21 日の復活祭には、細川玉子（教名ガラシア）が初めて大坂の教会を訪れている。

このような蜜月時代を経て、急転直下、伴天連追放令は発布された。

ただ、追放令直後の天正 15 年 7 月 12 日より 8 月晦日までの時慶の日記は残っていない。

#### 4. 前田玄以の息子たち

五野井隆史監修『キリシタン大名』所収の狭間芳樹「前田秀則・茂勝」は、「玄以はキリシタンではないが、長男の秀則（1576－1601）および次男の茂勝<sup>10)</sup>（1579?－?) はきわめて篤信なキリシタンであった」、「秀則はパウロ、茂勝はリアン（レアン）との霊名をさずかった（なお、茂勝は 1597 年以降、コンスタンチノと呼ばれた）」と、玄以の二人の息子がともにキリシタンであったと言い切っている。この兄弟は「きわめて短期間のうちに、「諸祈祷」を暗記し、…キリシタンの教義に関する、他の多くのことを学んだ」という。

兄弟は両親つまり前田玄以夫妻に入信を秘密にした、と狭間芳樹は述べている。長男秀則は慶長 6 年（1601）、亡くなる間際に告解と聖体拝領をおこない、その信仰を両親に明らかにした。次男茂勝の信仰の告白については、後述する。

#### 5. 長男秀則と豊臣秀次

『時慶記』は、豊臣秀次が、玄以の長男秀則（『時慶記』の注記では秀以）と池田輝政の二人だけを従えて、禁中の年賀に訪れたことを伝えている。

殿下〔秀次〕御参内、当年ノ始也、…撰家衆御参、九条殿・一条殿・近衛殿・鷹司殿・右府御参也、伏見殿・八条殿御参也、其外清華不残堂上同、西ノ縁ニ列座ス、殿下〔秀次〕御供ハ吉田侍従〔池田輝政〕・民部法印息ノ侍従〔前田秀以〕斗也（文禄 2.4.1）

池田輝政は、播磨姫路藩主となる前は三河吉田城主であり、吉田侍従と呼ばれた。

「民部法印息の侍従〔前田秀以〕」は、小玄（小源）とも呼ばれた当時 16 歳の長男秀則を指している。秀則は天正 14 年（1586）にわずか 9 歳で従四位侍従に叙任された<sup>11)</sup>。

文禄 2 年（1593）5 月 12 日には、秀次を中心にした公家衆の食事と和歌の会が開かれ、「撰家迄は民部法印息侍従役〔前田秀以〕奏〔送〕」とある。

12 月 3 日の「早辰民部法印へ、関白殿被申入、御能御沙汰見物に参候」の記事にあらわれる「関白殿」は、秀吉について豊臣家二代目の関白となった秀次を指す。

この日の能は 9 番もあり、うち兼平・源氏供養・邯鄲の 3 番を秀次が演じ、法印侍従つまり前田秀則が、井筒および最後の「切（きり）」の演目として呉羽を演じている。

どうやら玄以の長男秀則は豊臣秀次に気に入られていたようである。

文禄 4 年（1595）7 月の秀次の自害にいたるまでに、前田玄以や孝蔵主らが秀吉の命令を受けて果たした役割には諸説があり、詳細は不明である。

## 6. インド副王への返書

前田玄以がイエズス会に対しておこなった最大の功績(?)は、天正19年(1591)にイエズス会巡察師・ヴァリニャーノが持参したインド副王の書簡への「返書」を、当初の原案からイエズス会の意向に沿うよう書き直したことである。

当初の内容は、要は、有名無実となっていた4年前の伴天連追放令を復活する、という通告であった。イエズス会がこの原案を入手した経路はよくわからない。

「オルガンティーノ師が、我らイエズス会員に代って誰か機を見て関白(秀吉)に本件について話してくれる者がいないのかと求めていたところ、我らの主なるデウスは、玄以法印なる異教徒で、都の所司代(ゴベルナドール)である人の心を動かし給うた。彼は関白から篤く信頼され、正義を愛し、思慮に富み、誠実な人物としてその名を知られていた」<sup>[12]</sup>。

フロイスは、「所司代は我らの事情に好意を寄せ、はなはだ巧(たく)みに関白に伝達した」と伝えている。

ついで、日本語の達者な修道士ジョアン・ロドリゲスが秀吉を説得する。

「関白はまた、インドでは皆、誰もがキリシタンなのか、と訊ねた。修道士はそれに答え、インドは大国であり、幾つもの宗教があつて、なりたい者だけが自由にキリシタンになる。…誰もその教えを悪く思いはいたしませぬ、と言った。これを聞くと、関白は非常に満足した様子でこう言った。日本でもそれと同様にあるべきである」。

秀吉が望んだのは、ポルトガルとの通商であり、インド副王との使節の交換であった。

「宗教は、各人が従来信じていたものを信じるがよいのだ」、さらに小声で「日本では下賤の者どもがキリシタンになるのは一向に差支えはない」と秀吉は付け加えた。

かくして返書は書き改められた。

以上の秀吉の発言には、多分にフロイスやイエズス会の粉飾があるであろう。けれども、玄以がキリシタンに少なからず好意を寄せていたのは、歴史的な事実であろう。

1593年(文禄2年)、フランシスコ会士来朝の折、イエズス会日本準管区長であり、実質的に日本の責任者であったペドロ・ゴメス<sup>[13]</sup>宛に、玄以は書簡<sup>[14]</sup>を送っている。

「はて連法流の儀、あやまりの段、聊無之候へとも、日本依為神国、彼法日本にひろまり候へは、神道破候間、如何と被思召、成御払候」。

ここには、キリスト教を「邪法」「妖術」、神仏儒を信奉する日本人にとって「有害」とみなす考え方は存在しない。この書簡には、玄以の誠実さがあらわれているのではなかろうか。

## 7. 徳善院僧正

慶長5年(1600)の『時慶記』からは、玄以は徳善院<sup>[15]</sup>と呼ばれている。

徳善院上洛ノ沙汰アリ、但伏見迄上ト後ニ聞(慶長5.1.9)

徳善院へ綿帽子ニ遣候、数刻相待テ酒アリ、其後対面也、心静ニ物語アリテ立(慶長5.11.14)

慶長7年(1602)3月ごろから玄以は病床につく。

徳善院見舞，不例以外也，今日ハ少験ト（慶長 7.3.14）

豊国社へ詣次ニ徳善院見舞，煩同篇（同様）ト（慶長 7.4.18）

この前段に、「大膳亮来儀，内儀の脈診，無異儀」，「津軽宮内〔信建〕より有使，…煩同篇也」とあり，時慶の内儀・津軽信建・玄以の三人が，同じ病気にかかっていたようである。

5月7日早朝，孝蔵主から急使がやって来る。

早辰孝蔵主ヨリ使ヲ給，徳善院煩以外ノ由候，則行，巳〔辰〕刻斗ニ遠行，磯辺〔宗色〕ニ逢テ帰ル，宮木忠兵衛〔宮城貞治〕尉ニモ逢候，言語道断ノ旨申候（慶長 7.5.7）

5月11日には葬儀が営まれた。（寿量品（じゅりょうぼん）は法華経の一品）

徳善院葬礼妙真〔心〕寺ニテ在之，巳刻ト，〔板屋〕左近丞ヲ遣候，寿量品ヲ贈（慶長 7.5.11）

このとき椿事が発生した。玄以の二男茂勝が，「キリシタンでない玄以の葬儀の際に，多くの異教徒の前で自らの信仰を公言」<sup>[16]</sup>したのである。

茂勝は生前の玄以に，信仰を告白していたようである。その時，玄以は「もし太閤がキリシタン全部の処刑を命じれば，私の仲介で許されると考えないでほしい」つまり自身の子供の命よりも秀吉の命令を優先する，と言ったとフロイスは伝えている<sup>[17]</sup>。

茂勝は，26歳で亡くなった長男秀則に代って，玄以の遺領を継ぎ，そののち丹波の八上（やかみ）藩主となった。『寛政重修諸家譜』巻1140は，慶長13年（1608）6月，茂勝が発狂して重臣を殺傷し，多くの家臣を切腹させたため，所領を没収された，と記している。

## 8. 前田玄以とイエズス会をつなぐ道

慶長7年（1602）8月7日，「徳善院為追善懐旧」の連歌会が小寺孝高すなわち秀吉の軍師として知られるキリシタン大名・黒田官兵衛（如水）を亭主として開かれた。

連衆は，時慶のほか，日野輝資・広橋兼勝・多羅尾助兵衛（河内三好家の三好生勝）・休矣（きゅうす？）および里村紹巴<sup>[18]</sup>門下の昌叱・昌琢・玄仍・玄仲であった。

慶長8年（1603）にも，翌4月30日に後陽成天皇や公家衆が出席する「公宴連歌之御会」をひかえた4月29日，「連歌興行，徳善院為追善也」と，里村紹巴の門弟や「北野衆」ら11人で連歌会を催している。

時慶と玄以，言いかえれば京都の公家と豊臣政権は，連歌を通じて結ばれていた。

時慶は，慶長9年（1604）5月21日と慶長15年（1610）2月17日にも，豊国社を訪れ，「徳善院」の影（絵像）を拝み，焼香している。慶長19年（1614）5月7日の「徳善院十三回忌」には，追善の面（表）八句（連歌の最初の八句）を独吟・清書して，位牌に備えている。玄以の未亡人養福院には，それまで通りこの日も供養の品々を贈っている。

なぜ，時慶はこれほどまでに固い絆（きずな）を玄以と結んだのであろうか。

なぜ，玄以はイエズス会に好意を寄せ，秀吉の説得に協力したのであろうか。

時慶は，慶長8年3月3日，「早朝に孝蔵主来入，寒酒にて祝，庚申守，予は酔臥故無其儀，近年の怠慢也」と，キリシタンの小集會と考えられる「庚申守」の集い<sup>[19]</sup>に参加しなか

ったことを、「近年の怠慢」と自戒している。これまで述べてきたとおり、そして、この記事からも、少なくとも時慶はキリシタンに近い位置にいた、と言えるのではないか。

書写時の誤記・誤字がそうとうあると思われるが、1596年（慶長元年）12月のフロイス発・イエズス会総長宛の書簡<sup>[20]</sup>に、「前田玄以の二男が、この夏、病気になったとき、修道士・ヴィセンテ洞院の薬で治癒し、両親が喜んだ」という逸話が載っている。

細部はともかく、玄以は息子を治療したヴィセンテ洞院に恩義を感じたのであろう。

新在家の医学者・曲庵が修道士・ヴィセンテ洞院に比定できることはすでに述べた<sup>[21]</sup>。

おそらく時慶が曲庵すなわちヴィセンテ洞院を紹介したのであろう。

フロイスの「日本史」には、インド副王への返書を書き直すため、「オルガンティーノ師の側から派遣された一人の修道士が玄以法印と対談中、法印の友人で、我らとは一面識もない別の異教徒の貴人が同席していた」とある<sup>[22]</sup>。

この「一人の修道士」こそ、ヴィセンテ洞院すなわち新在家の曲庵であり、同席していた「法印の友人で、我らとは一面識もない別の異教徒の貴人」は、時慶または時慶の従兄弟の飛鳥井雅継（飛中）ではないだろうか。

前田玄以とイエズス会の修道士や宣教師たちとをつなぐ道には、キリシタンたちのきわめて近い位置にいた西洞院時慶や飛鳥井雅継が立っていたのではないだろうか。

[1] 五野井隆史監修『キリシタン大名—布教・政策・信仰の実相』所収の狭間芳樹「前田秀則・茂勝」529-534p. 狭間は、主に松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』の1594年9月29日付オルガンティーノ発イエズス会総長宛書簡および翌年2月14日付書簡に依拠している。

[2] 松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史 5』128-140p.

[3] 伊藤真昭「近世初期の所司代に関する研究：寺社との関係を通して」博士論文（大阪大学）。

[4] 天正15年11月28日には、秀吉が前田玄以の屋敷で開かれた連歌会にやって来ている。

[5] 梅軒宗句は玄以の右筆。ほかの右筆には礪部宗色がいる。

[6] 天正16年6月、後陽成天皇は完成した聚楽第に行幸し、5日間宿泊した。

[7] 円山内匠助（円山号庵）。翌5月11日に「円内匠ヨリ文、百疋為志被贈也」とある。

[8] 『完訳フロイス日本史 4』112-116p.

[9] 『完訳フロイス日本史 4』117p.

[10] 『国語史への道・上』所収のH・チースリク「イルマン・ヴィセンテ洞院」380pは、1596年12月3日付フロイス書簡に依拠して、「前田玄以法印宗尚の二男宗利は、すでに洗礼を受けレオと称していた」。

[11] 伊藤真昭『京都の寺社と豊臣政権』法蔵館2003年40p.

[12] 『完訳フロイス日本史 5』128p.

[13] ペドロ・ゴメスは「天球論」をふくむコレジオの『講義要綱』の著者でもある。

[14] 『キリスト教史学第19集』所載A・タラドゥリース「P. ペドロ・ゴメス宛前田玄以の未刊の一書簡（1593年）」佐久間正訳。書簡は漢字かな交じり文のポルトガル語訳から佐久間正が日本語に重訳した。

[15] 伊藤真昭『京都の寺社と豊臣政権』によると、玄以は文禄5年5月に「徳善院僧正」の院号・僧官の勅許を得ている。すでに文禄4年8月に「徳善院」の使用例があるとも指摘している。

[16] 狭間芳樹「前田秀則・茂勝」532p.

[17] 狭間芳樹「前田秀則・茂勝」532p 所引のルイス・フロイス『日本二十六聖人殉教記』結城了悟訳・純心女子短期大学長崎地方文化史研究所1995.

[18] 慶長7年4月12日条に「紹巴此暁遠行由候間」とあり、時慶はすぐに門下の昌叱・昌琢・玄仍・玄仲と新在家の速水友益に連絡している。

[19] 「時慶記のキリシタン(4) 5.長野殿の謎」にキリシタン信仰を庚申信仰に偽装した例を示している。

[20] 前出の『国語史への道・上』のH・チースリク「イルマン・ヴィセンテ洞院」。

[21] 「時慶記のキリシタン(3)曲庵と呼ばれた人々」。

[22] 『完訳フロイス日本史 5』128p.